

東北アジア研究センター 創設30周年 記念特集号

contents

- 1 創設30周年記念特集
- 2 創設30周年記念式典・記念講演
- 3 創設30周年総合セッション
- 4 創設30周年パネル展示・セッション#1～#3
- 6 最近の研究会・シンポジウム
- 7 新任ごあいさつ
- 8 創設30周年祝賀会

進化と戦争から 再考する 地|域|研|究

2026年
5月15日[金] 16日[土]

式典と記念講演の報告



高倉浩樹

(ロシア・シベリア研究分野／センター長、教授)

2026年5月15日に東北アジア研究センター設立30周年記念式典・シンポジウムを行った。ここでは式典と特別講演について紹介したい。

私たちのアジア研では「進化と戦争から再考する地域研究」というテーマを掲げた。これは近年の激動する国際情勢や著しい科学技術の進展のなかで、地域研究が何を探求できるか考えたいと思ったからである。すでにこのニュースレターでも紹介してきたが、30年前、我々の研究所が創設された時には、冷戦崩壊後で今後世界が平和になっていくという見通しがあった。確かにグローバル化が進み、市民社会の拡大や多国籍企業などのポスト国民国家化が進んだのは事実である。しかし急速な情報化技術による社会の不安定化とパンデミックに続き、ウクライナやパレスチナ、中東での戦争・紛争によって世界は大きく変わりつつある。設立30年を経て、東北アジア研究が新たな取り組み課題として、戦争と進化を掲げたのである。

式典では、東北大学富永悌二総長（代読・青木孝文理事・副学長）、文科省大学研究基盤整備課の石田善顕課長、国立民族学博物館の關雄二館長から来賓挨拶をいただいた。それ以外にも大学共同利用機関法人人間文化研究機構長の木部暢子先生や上廣倫理財団の西村直喜氏、本学の理事・副学長をはじめとする数多くの臨席を得た。会場となったホテルメトロポリタン仙台には200人近くの来場者があった。

式典のなかでは、二つの記念講演があった。第一は、東京大学教授の川島真先生による「地域研究と対外政策研究—東アジア国際関係史からの視点」である。中国近現代史研究において日本を代表する研究者である川島氏は、従来の外交史が大国中心で行われてきたことを批判し、対象国の主体性に注目することの必要性を説かれた。それは、地域研究が重視してきた対象国の社会経済構造や思想や歴史の文脈のなかで、対外政策研究をすることなのである。

第二は、英国エクセター大学教授のトーマス・カリー教授による「対立の二面性—ユーラシア大陸のディープ・ヒストリーと現代アフリカが明らかにする社会秩序の進化」であった。それは紛争や戦争を人類史的な観点で検討する試みであった。長期的な視点から、戦争は人間社会の複雑化とその制度化に寄与する一方で、その争いは集団内において信頼や統治の不全、資源の持続可能性を損なってきたことを進化生態学的視点で説くものだった。

二つの講演は大変刺激的で、今後のアジア研にとって重要な道しるべになるものだった。式典に参加いただいた全ての皆様に感謝申し上げる。最後になるが、実りある式典と記念講演会の実現の背景には、これまで我々が蓄積してきた同僚たち及び事務スタッフとの協働と信頼が揺るぎないものとして存在することを記しておきたい。



集合写真



東北アジア研究センター長挨拶 高倉浩樹



東北大学富永悌二総長挨拶（代読 青木孝文理事）



来賓祝辞 文部科学省
大学研究基盤整備課 石田善顕課長



講師
東京大学 川島真教授



講師 エクセター大学
トーマス・E・カリー教授



記念祝賀会 乾杯のご挨拶
大学共同利用機関法人人間文化研究機構
木部暢子機構長

総合セッション

東北アジア研究のこれから



石井花織

(情報拠点分野／特任講師)



登壇した歴代センター長らによるディスカッションの様子



瀬川昌久名誉教授



岡洋樹名誉教授



千葉聡名誉教授



高倉浩樹センター長

アジア経済研究所
内藤寛子副主任調査研究員

東京大学 外村大教授

1 日目に行われた総合セッションでは、現センター長を含む歴代センター長 4 名が、東北アジア研究のあゆみと今後の展望について意見を交わした。当センターは、冷戦終結や中国の改革開放以降に伴う国際関係の変化を受けて、日本とロシアや中国をはじめとする周辺地域との新たな学術交流の可能性を探ることを目的として 1996 年 5 月に設立された。それから 30 年を経た現在、大国間の緊張の高まりや AI 技術の急速的な発展など、世界情勢や学術をとりまく環境は大きく変化している。

第 5 代(2007-2008 年度)のセンター長を務めた瀬川昌久名誉教授は、1972 年の日中国交正常化以降に展開した自身の中国研究の軌跡や、センター設立当時「官民を挙げてロシアと交流しようという機運」を振り返った。地域研究はこうした国際関係や国家戦略との結びつきを免れない一方、関係が冷え込んだ時こそ「地域研究の真価が問われる時」であるとし、研究の本質的な目的を共有することによる現地の研究者との交流継続の重要性を説いた。

第 7 代(2013-2016 年度)のセンター長を務めた岡洋樹名誉教授は、冷戦期の緊張関係を想起させる「北東アジア」と区別し、「東北アジア」が交流可能地域として再定義された経緯や、多様な専門分野の研究者を「融合」ではなく「連携」するための試みについて足跡を辿った。これまで東北アジア地域との大学間協定や国際シンポジウム、客員研究員の招聘等の取り組みを振り返り、今後は欧米研究者や学内研究者との連携強化も重要になると指摘した。

第 9 代(2021-2023 年度)のセンター長を務めた千葉聡名誉教授は、設立当時の資源探索を目的とした「戦略型地域研究」から「地域理解型地域研究」へとミッションが移行してきたこと、さらに近年は中国をはじめ現地の研究水準が飛躍的に向上し、日本の研究者が現地で行う意義も問い直されていることを指摘した。また、生物多様性をめぐる課題が広く共有される価値となったことを受け、人文社会科学と自然科学の連携が重要性を増していることや、AI 時代においてもフィールドワーク

に基づく知識創出の意義は失われないことを強調した。

第 8 代(2017-2020 年度)および第 10 代(2024 年度-現在)のセンター長である高倉浩樹教授は、センターにおける学際的共同研究の歴史を振り返るとともに、ロシアによるウクライナ侵攻を受け、東北アジア地域の協力や共生を前提としてきたセンターのミッションが再び問われていると指摘した。そのうえで、新設された地政学研究部門を紹介しながら、変化する国際情勢に対応するとともに、政治的対立下における国境を越えた研究交流を継続する重要性を訴えた。

コメンテーターにはアジア経済研究所の内藤寛子副主任調査研究員と東京大学の外村大教授を迎えた。両氏からは、フィールドワークが困難となった地域を対象とする若手研究者の確保や、市民社会との連携を通じた排他的ナショナリズムの克服といった今後の課題が提示された。総合討論では変化する時代のなかで研究の新たな可能性を探る、活発な議論が交わされた。

パネル展示

協働とつながりから考える東北沿岸地域



デレーニ・アリーン
(日本・朝鮮半島研究分野／教授)

研

究をより幅広い人々に伝え、交流する方法として、今回は展示という形式を選んだ。写真をはじめとする視覚資料には、学術的な文章だけでは伝えにくい人々の姿や場所、関係性、日常の営みを伝える力がある。展示を通して研究内容を知ってもらうだけでなく、研究を形づくってきた地域や人々



展示のSEAQUEST映像コーナーを準備する
デレーニ教授

との関係性にも触れてもらいたいと考えた。

私は長年、沿岸地域や漁業、人と環境との関係について研究してきた。特に宮城県沿岸部での長期的な民族誌的調査を通じ、地域の知識や人間関係、文化的実践、場所への愛着が、環境や社会の変化への対応にどのように関わるのかを考えてきた。その中で、地域の人々との協働は研究の根幹をなすものである。知識は地域から一方的に「収集」するものではなく、長期的な関係や参加、対話を通して共につくられていくものだからである。

展示では、こうした協働研究の三つの事例を紹介した。第一は、漁業者、地域住民、自然科学・社会科学の研究者との分野横断的な研究である。第二は、花渚神社氏子青年会と

の参与観察で、祭りの運営や神社の維持管理、災害に備えた山への避難路整備などに共に取り組んできた。第三は、東日本大震災の被災者によって結成された「七・七つながり支援隊」との協働である。同団体は、自らの被災経験を生かして他の被災地を支援するとともに、その経験を次世代へ伝える活動を続けている。

展示で特に印象に残ったのは、来場者との交流であった。写真をじっくり見ながら質問をしたり、自らの経験や考えを語ったりする方も多く、そこから思いがけない方向へ話が広がることもあった。こうした前向きな交流を通して、展示は単に研究成果を伝える場ではなく、写真をきっかけに対話が生まれ、経験が共有され、新たなつながりが始まる場にもなり得ることを改めて感じた。

セッション

戦争と記憶



石井弓
(中国研究分野／准教授)

第

二次世界大戦終結から80年が経過した現在、2026年のロシア・ウクライナ戦争や中東情勢に見られるように、過去の戦争記憶を引き合いに出した攻撃の正当化や兵士動員が後を絶たない。戦争記憶は集団のアイデンティティと結びつき、国際関係の中で想起と忘却を繰り返しており、歴史学、社会学、人類学から国際関係論に至るまで多様な分野で論じられる学術的な「問題系」となっている。

こうした背景のもと開催された本セッションでは、アジアを対象に戦争記憶の変容と利用の実態を追及した。東北アジアにおける固定化された対立構図に対し、現場でのフィールド調査、ヴァナキュラー（民衆的）な記憶への着目、多国間での対比を通じて、より広い視野からこの問題を捉え直すことを試みた。

発表内容は多角的な時間・空間に及んだ。程永超氏は16世紀末の壬辰戦争の記憶が東アジアの地域秩序形成に与えた影響を考察。高城建氏はアジア太平洋戦争・朝鮮戦争・ベトナム戦争が朝鮮半島の国家正当性や国民統合に及ぼした影響を分析した。前田しほ氏は国家的追悼から漏れるスモレンスクの記念碑調査を通じ、記憶と忘却の構造に迫った。石井弓は日中戦争における中国の公的表象と民間の語りを照らし合わせ、記憶の対抗と連関を提示した。

本セッションは記憶が持つ政治性や社会を動かす感情の力をあぶり出し、JJI.COM（6月25日掲載）でも広く報じられるなど大きな意義を残した。世界が再び対立に向かう中、戦争記憶は東北アジアの未来を考えるうえで今後重要な研究課題となるであろう。



東北アジア研究センター HP
「戦争と記憶」セッションより

※1：出典 『征倭武功図屏』（韓国国立中央博物館蔵）

セッション

デジタルヒューマニティーズと
オープンサイエンス

「人文学を守るために日本の人文学者を減らせ」。そう語る先輩方の背中を剣呑だなあと眺めていた10年前。気づけば自分も同じ考えを抱くようになってしまった。石井敦氏と共同で企画した本セッションはデジタル技術による



講演中の田村准教授（コンピーナー）

「人文学の真摯さ」の改善をテーマとした。具体的には、筆者の問題意識である、民主化としてのオープンサイエンスと、日本の人文学の国際的な動向や制度・倫理規範からの乖離に焦点を当てた。講演者陣を見たセンター長が「すごくヤバイやつ」と評していたらしい。有松唯氏は、実際の文化財保全の現場から、国際的な規範との乖離により起こる現状の課題を紹介し、日本の人文学が実学としての力を失っていると述べた。小野英理氏は、オープンサイエンスとデータマネジメントについて、京都大学の取り組みをもとに、制度的な枠組みを描いて頂いた。川邊咲子氏は、これまで日本で支配的であった文化財保全の考え方からの転換と、民具資料の保全における課題をオー



撮影：波田野悠夏

文系征討将軍田村麻呂光平

（命名：山極海継氏。

山極氏のたつての願いでペンネームを使用）

（環境情報科学研究分野／准教授）

ブンサイエンスの取り組みによりどう解決するかについて講演された。「野家啓一の考える人文学は狭い」で有名な中尾「エターナルブリザード」央氏と、「狂気滅却の賢者」山極海嗣関白（命名：波田野悠夏氏）にもコメントを頂くなど、質疑も活発であった。「ガラバゴス化」、理系よりも多い研究不正、法や社会規範からの逸脱など、課題は山積している。先日も、ある人文学分野の重要概念（「欧米」では時代遅れとされている）が現在の国内の差別に加担しているとする論考がマイノリティ当事者から出された。東北大学での10年で、文系がどこで「悪さ」をするか勘所が掴めてしまった。色々一段落したら文系のダウンサイジングのためのコンサルにでも転職するかもしれない。

セッション

進化「地球変動と人類の変化」

「地殻変動や気候変動、隕石衝突をはじめ、地球史レベルの環境変化は、生命の絶滅、適応、多様化を駆動してきた。人類史においても、気候変動や巨大火山活動、地震活動による環境変化や地域の分断を通して、文化の変化を引



セッション会場の様子

き起こしてきた。また生命は人類の生活基盤となるとともに、文化に起きた変化は、それを取り巻く生命や地球環境にも影響を与えている。たとえば、人類史最大の火山噴火と言われるインドネシア・トバ火山の噴火（74,000年前）は人類の進化を停滞・衰退させたと言われているし、世界的に戦争や飢餓が頻発した3世紀と14～18世紀は、年輪や同位体から見積もられる寒冷化の時代と重なる。また、現在の人類の炭素排出による環境変化によって生命の絶滅スピードが速まっているとも言われている。

本セッションでは社会人類学、生物進化学、考古学、地球科学の観点から分野を超えた様々な時間スケールに伴う「進化」を通して、地球・生命・人類・文化のつながりについ



平野直人

（地球化学研究分野／教授）

て議論を行った。佐野は約260万年前から始まる石器文化の進化について人類の進化の見地から考察し、千葉は生命進化学における進化の概念の変遷を紹介し、高倉は文化人類学における進化の概念を深掘りした。研究分野によっては「進化」の捉え方、使い方が異なるため、お互いに理解して使用する必要があることを認識できたことがまず本セッションの収穫と言えよう。コメンテータとして登壇した九州大学・山本教授からは各現象や変化の成因を捉える重要性が述べられ、それらの議論が超学際研究の第一歩であることが示された。本センターオリジナルの異分野コラボレーションが始まる、そんな希望を抱くセッションであった。

2025 年度共同研究成果報告会



寺山恭輔

(ロシア・シベリア研究分野／教授)

会期 2026 年 6 月 26 日

会場 東北大学片平北門会館

6

月 26 日（金）、朝から小雨の降る中、片平の北門会館エスパスで 2025 年度の共同研究成果報告会を開催した。単年度、複数年度にまたがる共同研究 15 本に加え、プロジェクト研究 2 本の報告を、昼食と休憩を挟



研究会後の懇親会の様子

んで午前 10 時 30 分から午後 5 時半まで聞くことができた。出張、転任のためビデオによる報告や代理の方による報告もあった。外部評価を来年度に回したため、今年度は外部評価の先生に話を聞いていただく機会はなかったが、センター内外の関係者による活発な質疑応答（発表は 15 分、質疑応答は 5 分）がなされ、普段はなかなか聞くことの出来ない様々な共同研究の内容を詳しく知る貴重な機会となった。

センターは研究領域として A. 環境問題と自然災害、B. 資源・エネルギーと国際関係、C. 移民・物流・文化交流の動態、D. 自然・文化遺産の保全と継承、E. 紛争と共生をめぐる歴史と政治を掲げているが、A-3、B-0、C-3、D-3、E-4

という構成だった。A～E はあくまでも委員会が想定したものであり、研究テーマの設定は各研究者の創意に委ねられており、A～E 以外のテーマを立ち上げてもちろん構わない。紙幅の関係上詳しくは述べられないが、A～E の想定する研究テーマ、各共同研究やプロジェクト研究の内容、研究に従事する構成員等詳細は過去のものを含めセンターのホームページにも掲載しているので、関心のある方はそちらをご覧ください。今年は昨年同様、学外に少し足を伸ばし、新しく赴任した外国人研究員の先生方や事務室の皆さんも交えた懇親会でおいしい食事をともにしながら、楽しい時間を過ごすことができた。

ユーラシア映画上映会

「アニメからみえるロシア」講演会



パホモフ・オレグ

(ロシア・シベリア研究分野／助教)

会期 2026 年 5 月 24 日

会場 仙台市市民活動サポートセンター（宮城県）

2

026 年 5 月 24 日、仙台市市民活動サポートセンターにおいて、日本ユーラシア協会宮城県連合会主催の「ユーラシア映画上映会」の一環として、講演会「アニメからみえるロシア」が開催された。講師は、東北大学東北アジア研究センター助教のパホモフ・オレグである。

今回の講演は、これまで大学内外で行ってきた同テーマの講演を、新たな聴衆に向けて紹介するものである。主催者は、2024 年 2 月 1 日に開催された「隣国ロシアを理解するための東北大講座」第 6 回「アニメからみえるロシア」での講演を知ったことをきっかけに、今回の

講演を依頼した。また、2026 年度の東北大学の授業「東北アジア地域研究入門」においても同じテーマを扱っている。

講演では、ソ連・ロシアのアニメーションを、ロシアの文化や社会を理解するための一つの手がかりとして取り上げた。イワノフ・ワノー、レフ・アタマーノフ、ロマン・カチャーノフ、ユーリー・ノルシュテインらの作品を紹介しながら、ソ連アニメーション独自の映像表現、「子ども時代」の描写、子どもの世界と大人の世界の関係、さらにアニメーションが文化形成や教育に果たした役割について解説した。

また、ソ連アニメーションが日本のア

ニメーションに与えた影響や、日ソ・日ロ共同制作の作品についても紹介し、アニメーションの歴史を通してロシアと日本の文化的交流について考察した。



「アニメからみえるロシア」講演会

#1



小田桐睦弥

上廣歴史資料学研究部門／助教

おだぎり・むつみ ▶ 弘前大学大学院で博士（学術）を取得。花巻・弘前の市立博物館で学芸員として勤務。あおもり資料ネット準備会事務局。専門は日本近世史、日本近現代史、災害社会史、歴史資料学。

歴史資料で災害と地域社会を描く

私は近世から近現代における災害と地域社会の営みについて研究しています。学生時代から一貫して、近世の北東北における災害、寛保津波（1741 年）や明和津軽地震（1766 年）、安政の岩木山硫黄山出火（1856 年）などの被害や災害対応について明らかにしてきました。

また、花巻市博物館（岩手県）・弘前市立博物館（青森県）で学芸員を務め、地域の歴史だけでなく、東北の災害史に関する展覧会も企画しました。

現在は、災害時や被災後に地域社会がどのような共同性を形成するのかに関心を持っています。北東北に加えて南東北へも対象地域を広げ、東北地方の災害史を構築したいと考えています。

歴史資料の保全・継承についても災害とのかかわりから考え、資料ネットワークでの活動に力を入れています。

災害を通して、地域社会のあり方を歴史的に考えたいと思っています。

世界の海から見る近代日本

皆さん、こんにちは。2026 年 7 月に新設された地政学研究部門に着任した沈です。中国上海で生まれ、復旦大学卒業後、カナダのトロント大学で歴史学の博士号を取得しました。その後、同大学のポスドク研究員、香港樹仁大学歴史学部助教を経て、仙台に参りました。専攻は日本近代史、近代東アジア史、国際海軍史です。中国出身で、カナダで博士号を取得し、現在は日本で働くという国際的な経歴と視野を生かして、研究に取り組んでいます。

海は、その国際性を映し出す魅力的な研究対象です。国々は海でつながっています。島国である日本にとって、海は歴史と生活を支える大切な存在です。私は、20 世紀転換期の東アジアにおいて、海洋主権という概念がどのように理解され、実践されたのかを研究しています。特に、帝国日本が激変する国際秩序のなかで、海洋主権を柔軟かつ実用的に運用した過程に注目しています。現代の海洋紛争を、より広い歴史的視野から考える手がかりを示したいと思います。何卒宜しくお願い致します。

#2



沈佳穎

外交・安全保障研究分野／助教

しん・かえい ▶ 中国上海出身。トロント大学で博士号（歴史）を取得後、トロント大学ポスドク研究員と香港樹仁大学歴史学部助教を経て現職。

#3



LEBEDEV
Vasilii

民族間関係・紛争研究分野／助教

れべでふ・うゐしり ▶ 東北大学東アジア研究センター助教。東京大学東洋文化研究所（IASA）での勤務を経て現職。専門は中国近現代史、東アジア共産主義運動史。

東アジア共産主義運動史の史料研究

ナショナリズムの高まりと脱グローバル化が進む現代において、歴史的知識を保存し、広く共有することは、歴史研究者にとって最も重要な課題の一つです。私の研究は、20 世紀前半の東アジアにおける共産主義運動史に関する史料の収集と分析に焦点を当てています。関連史料を収集・整理し、将来的には広く公開して誰もが利用できるようにすることを目指しています。

本研究センターでは、主に二つの研究プロジェクトを進める予定です。一つは、1920 年代から 1940 年代にかけての満洲におけるロシア人および中国人共産主義者の活動と基層武装集団との関係に関する研究です。日本国内外、とりわけロシアの公文書館で史料調査を行い、共産主義革命家や「馬賊」と呼ばれる基層武装組織に関する未発掘史料の分析を進めます。

もう一つは北朝鮮国家形成の研究であり、史料に基づく金日成伝の執筆を目指しています。研究成果をロシア語、日本語、英語、中国語で発信するとともに、第二次世界大戦後の東アジアにおける国家形成を研究する国内外の研究者との連携も深めていきたいと考えています。

東北アジア研究センター創設 30 周年記念祝賀会



高倉浩樹センター長の挨拶



岡洋樹元センター長の挨拶



寺山恭輔副センター長締めめの挨拶



会場の様子



会場の様子

1996年5月、日本・朝鮮半島・中国・モンゴル・ロシアを総合的に捉える地域研究期間として設立された東北アジア研究センターは、本年で30周年を迎えた。当初5つの研究分野で設立されたセンターは、30年の間に10以上の研究分野を携え、文系や理系の主軸の学問分野に加えてデータサイエンスも供えた超学際研究機関として成長した。2026年5月15日、ホテルメトロポリタン仙台において東北アジア研究センター創設30周年記念祝賀会が行われた。30年の歴史は長い。センターに関わった新旧様々

な、かつ文理多様な研究者や卒業生がそろい、関連研究機関の来賓が顔を揃え、センターの歩みを懐かしむと同時に、現在進めている各プロジェクト、学際共同研究の充実さを称えあった。祝賀会は当日午後、同会場で行われた記念式典、記念講演会、総合セッションののちに開催された。人間文化研究機構の木部暢子機構長からはセンターの多彩さを称える祝辞をいただいた。様々な社会現象や自然現象の仕組みが未解明な事項に対して、それらが研究プロジェクトによって解明されるまでは早くも5年、10年以上

かかるものもあろう。東北アジア研究センター創立30周年祝賀会は、将来の40周年、50周年をも見据えているようであった。(平野直人)



会場の様子

編集後記

とても充実していました。創設30周年記念行事。準備も大変でしたが異分野の理解が深まり、学際プロジェクトの芽吹きもあったように思います。

さあ、次は40周年に向けて！(平野直人)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第110号

2026年9月28日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

